

証言 18 頁より

作業員の証言は……

正確な時間をはっきり覚えていないのですが、「建屋がすごいことになっている！」という報告が来たのは、水位が下がり始めた 19 時以降だと記憶しています。

1 / 2 号機の運転員からの報告でした。

1 号機か 2 号機かは覚えていませんが、暗闇の中、原子炉建屋に懐中電灯を手にして近づいていったそうです。原子炉建屋は二重扉です。懐中電灯を照らして、まず外側の扉を開けて中に入り、次に内側の扉に近づき、扉のガラス窓に懐中電灯の光を当てた時です。

ガラス窓の向こう側に白いモヤモヤの蒸気が充満しているのを、運転員が見たというのです。

「あれは生 (ナマ) 蒸気です！」

この報告を聞いて対策本部内にいた人達は「どうするんだ」「まさか爆発しないよな」と口にしました。

「生蒸気」は二つしか考えられません。

一つは暖房用の蒸気です。しかし地震でボイラーが停止している上、暖房用スチーム管はその管は細い。

「暖房用ではないだろう」という声が上がりました。

そうすると、原子炉の蒸気をタービン建屋に送る主蒸気管しかない。

主蒸気系が壊れているとなれば、非常に危険で、そのフロアでは作業ができないことを意味します。

案の定、中央制御室の外側や、非管理区域まで放射線が検出されているという報告が来ました。

非常に線量が高いというのです。

「もう、この原発は終わったな。東電は終わりだ」。

この時、私はそう思いました。

主蒸気系の配管の場所を考えると、津波で壊れたとは思えません。

「生蒸気」の報告が来て、そこら中で「生蒸気が漏れているらしいぞ」と、多くの人達がざわざわと口に始めていました。